

令和元年度大台ヶ原自然再生推進委員会
生物多様性（種多様性・相互関係）ワーキンググループ 議事概要

1. 日時 令和元年 10 月 31 日（木） 14:00 ～ 16:00

2. 場所 近畿地方環境事務所 大会議室

3. 参加者

【委員】

松井 淳	奈良教育大学教育学部 教授
村上 興正	元京都大学理学研究科 講師
揉井 千代子	公益財団法人 日本野鳥の会奈良支部 幹事
横田 岳人	龍谷大学理工学部 准教授

【事務局】

環境省近畿地方環境事務所	玉谷 雄太	国立公園課長
	澤志 泰正	野生生物課長
	西 大輔	生物多様性企画官
	戸田 博史	野生生物課課長補佐
	関 貴史	吉野管理官事務所 国立公園管理官
(株) 環境総合テクノス	樋口 高志	環境部 マネジャー
	樋口 香代	環境部 リーダー
(一財) 自然環境研究センター	安齊 友巳	研究主幹
	高橋 佑亮	研究員

4. 議事

- (1) 鳥類テリトリーマッピング調査について
- (2) 植生タイプ別植生調査について
- (3) 蘚苔類調査現地検討結果について

5. 概要：

(1) 鳥類テリトリーマッピング調査について

○資料 1-1 鳥類テリトリーマッピング調査について

- ・ 表 1（調査日及び時刻）に調査の天候と時間が示してあるが、午前 5～6 時のルートと午前 7～9 時のルートがあるが、鳥の活動に差はないのか。同様に天候についても雨の日は鳥の活動に差はないのか。
⇒調査時間については、夏であれば朝 8 時頃、冬場では 12 時頃まで大丈夫である。雨よりも風の影響の方が大きい。資料で示されている風力程度なら調査をしても問題ない。
- ・ 表 1 には日の出時刻も記載しておくこと。
- ・ カラ類は、鳴き声だけでの判別は難しいため、霧の時は調査をやめておいた方がよい。
- ・ 防鹿柵内外のウグイスの確認状況について χ^2 検定を行っているが、 χ^2 検定は総数が概ね 5 以上の時に使う。 χ^2 検定をするのであれば、これまでのデータをプールして行う方がよい。
- ・ すべてのルートを全部まとめたものや、東大台と西大台でまとめたもので行ってみてはどうか。
- ・ ウグイスは各所で見られるようになっているが、ムシクイ類やヒタキ科、ツグミ類の減少が大きい。今年は特にそのような傾向が高かった。オオルリだけは多い傾向があった。
- ・ 渡り鳥については越冬地の状況も踏まえて要因を考える必要がある。
- ・ 調査は 8 ルートのサンプリングであるが、大台ヶ原全体としてどうなっているのか、ということを示しておいた方がよい。
- ・ 調査データを西大台、東大台の 4 ルートずつにまとめて、大台ヶ原全体で繁殖している種が種数として減少しているのかどうかについて解析しておく。
- ・ 営巣、利用環境ごとに分けて考えた方がよい。
- ・ テリトリーが大きい種が優占すると、テリトリー数は少なく、テリトリーが小さい種が優占するとテリトリー数は多くなるので、その年ごとにどちらの種が優占するかによって、全体のテリトリー数が左右される。テリトリー数での解析は難しいのではないか。
- ・ サメビタキがこの時期に大台ヶ原で出現するのは珍しい。奈良県内では繁殖時期にサメビタキのデータはほとんどない。

○資料 1-2 2019 年コマドリ調査隊調査結果について

- ・ これまで確認されていて今年確認されなかった場所は 3 ヲ所あった。東大台はここ数年とあまり変化がないようである。西大台は巡視員による観察事例も含め、かなり見ているが、今年は少なかったようである。
- ・ 2016 年以降、コマドリが見られた箇所をすべてまとめてデータ化した方がよい。

(2) 植生タイプ別植生調査について

- ・ 柵を設置する前のデータも示した方がよい。
- ・ 植生タイプⅦの柵内は、もともとミヤマシキミが多かった場所がスズタケが優占するように変化したことがデータとして出るとよい。
- ・ 10 年間で柵内がどう変わったのかを文章として記載することはできないか。柵外でニホンジカの食圧が減ったことがトレンドとして出せるようには至っていないのか。
⇒大きく変化した点として、スズタケ型植生では柵内ではスズタケが大きく回復した。植生タイプⅥは柵外でもスズタケが回復してきているようである。ニホンジカの個体数調整の効果が表れ

つつあるといった傾向である。ミヤコザサ型植生では、柵内でササの被度が高くなると確認種数が減少した。

- ・ 防鹿柵の中の植生が豊かになったことをデータで示すことは難しい。ササが回復してくると、次はササが枯れるといったイベントが起こらないと変化が起こらないのではないか。
- ・ 草本層の変化がないように見えるのは、ササの下でも生育できるものが、そのまま変化していないだけのように見える。種に着目して変化をみることはできないか。
- ・ 全体で起きている変化を多様性の視点で追っていく作業が必要である。
- ・ 全体的な被度に着目した解析と種に着目した解析をした方がよい。
- ・ 自然再生のサクセッションのどの段階であるのかを示すことはできないか。
- ・ ササを減らすために、柵を開放するといった対策も考えていく必要があるのではないか。シカを柵内に入れるのなら稚樹を保護する必要がある。

(3) 蘚苔類調査現地検討結果について

- ・ 「ひとつの沢にひとつのコマドリ」という言葉があるように森の乾燥化はコマドリの生息に影響を与える。蘚苔類の回復については森の乾燥化の抑制という視点からもコマドリの生息に関係してくると思う。
- ・ 苔探勝路なので歩道沿いで蘚苔類がまとまって生えているところは何か対策をとっていった方がよい。

以上、意見の順不同